

補説③

○180句目「張衡豈廢田」の「豈廢田」についての考察

この一句は、張衡（張平子）の「帰田賦一首」を踏まえる。李善は「帰田の賦は張衡仕えて志を得ず、田に帰らんと欲す。因つて此の賦を作る」という。官をやめて、隠遁することを「帰田」という。その「賦」のなかにつぎのような内容が記されている。

「都に来て久しくなるけれども、時世を救うほどの才略もなく、むなしく川を前にして魚を手に入れたいと願うだけで、黄河の澄むのを待つてはいるが、まだその時期は来ない。天道はまことに深遠でどうにもはつきりさせることはできず、まずは例の漁夫と楽しみを同じくし、俗塵をはるかに超越して、世間と縁を絶とうと思う。野に下つて魚を取り鳥を射落とし、我が家に帰れば、五弦の琴をかき鳴らして書物を読み文章を作る生活であつた。心を俗世の外に放てば、この世の榮辱などは、吾身に何のかかわりがあるうか」この賦の内容からも窺えるように、張衡は任官できないまま野での生活を余儀なくされたのだ。そうせざるを得ない境遇であつた。道真は、張衡や潘岳のように宦官や小人の讒言により困難で苦しい生活を余儀なくされたこの二人の生き方に心を慰められたものと思われる。

補説④

○181句目「風摧同木秀」についての考察